

Title	民間説話・伝承における山姥、妖精、魔女
Author	高島, 葉子
Citation	人文研究. 65 巻, p.115-135.
Issue Date	2014-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	堀内達夫教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

民間説話・伝承における山姥、妖精、魔女

高島葉子

本研究では、日本の妖怪である山姥はヨーロッパの魔女よりもホレやフェなどの妖精に近い存在であることを示した。しばしば山姥と魔女について、森、山に棲む人喰い鬼婆である、変身能力がある、両義性をもつなどの類似性が指摘されてきた。しかし昔話のなかでは異なる扱いをされている。例えば、国際話型である「米福・粟福」をヨーロッパの類話と比較すると、山姥に相当するのは、ドイツではホレ、フランスではフェ（あるいは聖母マリア）であって魔女ではない。彼らの機能は「贈与者」であり、人間を裁定し、良い娘には褒美を悪い娘には罰を与える女神的存在である。一方、魔女は、たとえ親切な場合でも、主人公に退治あるいは報復される「敵対者」としてしか登場しない。この違いには、民俗社会におけるそれぞれの機能の違いが反映されている。山姥、ホレ、フェは人間に害をなす存在として恐れられているが、同時に女神として信仰の対象でもある。彼らは人間には統御できない超自然的存在なのである。しかし、魔女は時に呪術を使って悪事を働くが、人間の女性であり、悪魔のような超自然的存在ではない。この点で山姥は魔女よりホレやフェに近い。

はじめに

山姥とは山に棲む鬼婆、妖怪であり、その姿は醜く恐ろしく、人を取って喰うとされている。この山に棲む醜怪な人喰い鬼婆であるという特徴から、山姥はヨーロッパの魔女を連想させ、山姥あるいは鬼婆とヨーロッパの魔女の類似性が指摘されている。例えば、宮田登は「魔女と鬼女」(1982)という論考を書いている。高橋義人は『魔女とヨーロッパ』(1995)で一章を魔女と鬼女の比較検討に割き、大和岩雄の『魔女はなぜ人を喰うのか』(1996)にも「魔女と人を喰う山姥・鬼婆」という章がある。確かに、森・山という異界に棲む、醜怪な容貌の人喰い鬼婆という山姥像は魔女に類似している。また、老婆とされているが、時に若く美しい姿で現れる、また、人間に親切な行動をとることもあるなどの類似点もある。しかし、例えば、日本とヨーロッパの同話型の昔話を比較すると、山姥に相当するのはドイツではホレ (Holle)、フランスではフェ (Fée) や聖母マリアである。魔女は登場しても異なる役割、機能を担っている。また、山姥と魔女との類似性はホレやフェにも認められる。山姥は魔女とホレやフェなどの妖精とどちらにより近い存在なのだろうか。また、魔女と妖精はどのように異なるのか、本稿では、こうした点を民間説話、伝承における山姥、魔女、妖精を比較検討することによって考察する。

1 山姥と魔女の共通点

上掲の先行研究において挙げられている山姥と魔女の共通点をまず確認しておく必要がある。両者に共通しているとされているのは、整理すると以下の四点である。

- ① 山・森に棲む人喰い鬼婆である。
- ② 醜怪な老婆にも、若い美女にもなる。
- ③ 空中飛行、変身能力がある。
- ④ 善悪両義性をもつ。

上記の四点のうち、①～③までは確かに両者に共通する特徴であると判断できる。しかし、④に関しては検討の余地がある。まず、①～③に関して妥当性を示し、その後④についての問題点を考察する。

1-1 山・森に棲む人喰い鬼婆

山姥と魔女は、山・森に棲む恐ろしい老婆の姿をした人喰いであるということが指摘されている。宮田は「魔女と鬼婆」において、「恐ろし気な魔女に類するイメージ」を持つ事例として、山姥伝説が基になった、新潟県弥彦山の弥三郎婆伝説を挙げている。弥三郎婆は弥彦山に棲み、時折、山麓に出てきては人肉を喰らって200年生きたとされる鬼婆である¹⁾。大和も魔女との共通性を示す事例のひとつとして、やはり鬼婆である弥三郎婆を挙げている²⁾。高橋も同様に魔女の特徴として、森の住人、乱髪で恐ろしい眼つき、人喰いを挙げ、日本の山姥や鬼婆との類似を指摘している³⁾。

山姥は確かに山・森にすむ醜怪な老婆である。これは『日本民俗事典』の次のような記述から明らかである。

山中に棲む妖怪と考えられている女。多くは老女のように伝えられる。その容貌に関する伝承で共通した特徴は背が高く、髪の高いことで、そのほか口が大きくさけていたり、眼光がかがやき、色は特別に白いなどの伝承がある⁴⁾。

ヨーロッパの魔女はどのように描写されているだろうか。ヨーロッパの魔女で一般によく知られているのは、グリム (Grimm) 童話集の中の「ヘンゼルとグレーテル」(KHM15) に登場する魔女であろう。やはり魔女は森に住んでおり、「ひどく年とったおばあさん」⁵⁾と語られている。文章からは年取ったという以外に魔女の容貌について詳しくは分からないが、挿

絵や絵本に描かれる姿は、皺の深い、痩せこけた醜い老婆である。また、ベッヒシュタイン (Bechstein) 版では、「背中がまがり、目がくぼんだ、とても醜いおばあさん」⁶⁾と表現されている。上の例はドイツの魔女であるが、他の地域、例えばアイルランドの魔女はどうであろうか。

J. ジェイコブズ (J. Jacobs) の再話編集した『続ケルト妖精物語』の中に、「うすのろと王子たち」⁷⁾という話がある。この話の魔女は森に棲んでいるとは語られていないが、魔女の家は、人里から遠く離れた、人間を殺した者には渡ることができない「血の橋」を超えた場所にある。民間説話において山や森は異界であるが、この「血の橋」を超えた場所も異界と考えてよいだろう。なぜなら、「橋」は人間界と異界の境界として考えられるからである。しかもこの橋は殺人という「死」と関わった者の世界との境である。この魔女の外貌についても老婆であること以外は詳しく語られていないが、魔女を表す単語として「醜い老婆」を表す“hag”が使われている。ブリテン諸島の民間説話では、魔女を表す単語として“witch”の他にこの“hag”という単語がしばしば使われる。COE では、“hag”は“1 an ugly old woman. 2 a witch”と定義されている。つまり、魔女は醜い老婆と同義なのである。また、この話の挿絵には、手に杖を持った、大きな鉤鼻の醜く不気味な姿の老婆が描かれている。ブリテン諸島でも魔女は醜怪な老婆であり、異界に棲むと考えられているのが分かる。

最後に山姥も魔女も人喰いであることを確認しておこう。山姥は、山中に来た者、特に子供をとって喰うとされてきた。昔話の「三枚の札」、「馬子と山姥」、「天道さんの金の綱」などには、人を喰う恐ろしい山姥が登場する。柳田国男も『遠野物語』の中で、「ヤマハハは山姥のことなるべし」として、人喰いの鬼婆に留守番の娘が喰われる話を紹介している⁸⁾。

この人喰いの属性は魔女についてもよく知られたものであり、ヨーロッパの昔話にも人喰いの魔女が登場し、やはり特に子供を好んで食べる。「ヘンゼルとグレーテル」の魔女は、「子どもが手に入ると、殺して、煮てたべてしまいます」⁹⁾と語られている。先に紹介したアイルランドの「うすのろと王子たち」でも、魔女は多くの人間を殺したり、魔法で人間を豚に変えて食べ頃になるまで飼育したりしている¹⁰⁾。

1-2 醜怪な老婆にも、若い美女にもなる

高橋、大和は、魔女も山姥も醜怪な老婆でも若い美女でもあるという二面性においても共通していると述べている¹¹⁾。高橋は、魔女の「美」と「醜」の二面性を表す典型的事例として、白雪姫の継母と¹²⁾ ゴーゴリ (Goromb) の「ヴィイ」に登場する魔女を挙げている¹³⁾。そして、これは日本の山姥や鬼女にも当てはまることを指摘し、例えば、新潟県柏崎市の昔話では山姥が不思議な孫の手によって美女に変身すること、また、「姥皮」では老婆に変身できる皮を持っていることを挙げている¹⁴⁾。この「姥皮」の山姥が持っている美女にも老婆にも変身できる皮については、大和も言及している¹⁵⁾。

「ヘンゼルとグレーテル」の魔女は醜い老婆だが、確かに「白雪姫」の魔女は美女でもある。山姥も多くの場合は醜怪な老女として伝えられているが、若く美しい女性の姿として語られることもあり、この場合は山姫、山女郎と呼ばれる。例えば昔話「食わず女房」では、山姥は最初、若い美女として現れ、結婚後に恐ろしい正体を現す。「三枚の札」にも、最初は美しい女として現れて小坊主を家に泊めるが、夜中に恐ろしい鬼女になるという展開の話がある。両者においてこうした二面性が共通しているとみてよいだろう。

1-3 空中飛行、変身能力がある

山姥・鬼婆も魔女も空中飛行し、変身する能力があると指摘されている。宮田が弥三郎婆を魔女に似た鬼婆として挙げていることはすでに述べた。高橋、大和も宮田の文章を引用し、この弥三郎婆伝説には魔女伝説と興味深い共通点があるとして注目している。彼らが指摘する類似性を確認するために、まず、この伝説を紹介した宮田の文章を引用する。

・・・弥彦山麓に弥三郎という孝行息子がいた。母一人子一人であるが、母親は残忍な性格で人肉を好んで喰っていたため、村人は鬼婆として恐れていた。母親は近くに葬式があると夜中に出かけ、墓地から死体を掘り出して食べるのであり、いつも葬式の出るのを喜んでい
る有様だった。ある年の夕暮、弥三郎が家に帰る途中、突然怪物に襲われたので、とっさに
持っていた鎌で怪物の手を切り落した。弥三郎はこの腕をもって帰宅すると、母親は具合が
悪いと臥していた。そして、その腕をみると、とたんに起き上がって、これは私の腕だと奪
いとり、家の煙出しから飛び去り、弥彦山にこもってしまった¹⁶⁾。

高橋はこの伝説について、「人食いといい、怪物への変身といい、また虚空に飛び去ること
いい、日本の昔話と魔女伝説との共通性は明らかではあるまいか」¹⁷⁾と述べて、両者の類似性
を指摘している。大和もこの文章を引用しつつ、「山姥も人を喰い、魔女と同じに空を飛ぶ」¹⁸⁾
と述べている。

弥三郎婆は怪物に変身するが、昔話「姥皮」の山姥は蛙に変身する。「三枚の札」では、最
後に和尚との化け比べで蚤、味噌、豆などに変身する。魔女が箒に乗って空を飛ぶことは有名
だが、山姥や鬼婆も空を飛ぶ。高知県には稲田や稗畑に火を放つと山姥が山の方へ飛び去るの
が見えたという伝説がある¹⁹⁾。この伝説は大和も挙げている²⁰⁾。

以上、先行研究において指摘されてきた山姥と魔女の共通点①、②、③を検討した。山姥と
魔女には、森・山という異界に棲む人喰いである、醜怪な老婆でも若い美女でもある、空を飛
び、変身する、これらの点で共通していると言えることが確認できた。しかし、最初に述べた
ように、④の善悪両義性という点に関しては問題がある。

1-4 善悪両義性

魔女は山姥同様に美醜の二面性を持つことはすでに確認したが、高橋、大和は、外貌だけでなく、魔女には善悪の両面があると主張している。高橋は、善き魔女の事例としてペロー(Perrault)の「親指小僧」を挙げている²¹⁾。「親指小僧」はATU327B²²⁾に属し、ATU327「子どもと鬼」のサブタイプである。「ヘンゼルとグレーテル」はサブタイプATU327Aに属する。従って、「親指小僧」は「ヘンゼルとグレーテル」の類話である。ヘンゼルとグレーテルのように、両親に森に捨てられた親指小僧を含む7人兄弟は、道に迷い森の中の人喰い鬼の家に辿り着く。人喰い鬼は留守で、家には人喰い鬼の女房がひとりである。この人喰い鬼の女房は、暖炉の火で子供たちを暖め、ベッドの下に隠し、食事を用意してやる。高橋は、「ヘンゼルとグレーテル」の魔女は、この話では「人喰い鬼とその妻二人に役割が分担されている」²³⁾と解釈している。つまり、人喰い鬼の女房は、ヘンゼルとグレーテルに食事を出し、ベッドを用意してくれる魔女の善なる面を表し、人喰い鬼は二人を食べようとする魔女の悪なる面を表しているということである。大和も魔女の二面性を指摘した個所で、この高橋の解釈を引用している²⁴⁾。高橋は、この「親指小僧」とよく似た日本の話として「鬼の子小綱」を挙げ、この話でも善悪両面が人喰い鬼と子どもを助ける親切な女に分担されていると述べている²⁵⁾。

以上のように高橋らは指摘しているが、ここで2点確認しておくべきことがある。まず、挙げられている事例はグリム童話とペローの童話からなので、口承話の事例も見ておく必要がある。「親指小僧」と同話型のフランス口承話に「悪魔の話」というのがある。この話においても、人喰い悪魔の女房は、森に捨てられ道に迷った人間の子供たちに食事を用意し、人喰いの夫に見つからないように自分の子供のベッドにもぐりこませてやる²⁶⁾。イギリスには同話型に属する「モリー・フッピー」という話があり、この話でも、人喰い鬼(巨人)の女房は人間の子供たちを家に入れ、暖炉の火に当たらせて食事を与える。そして帰宅した夫に誰かいるのか訊かれると、三人の可哀そうな子供が家にいるが、すぐに出て行くので手を出してはいけないと答える²⁷⁾。ここでもやはり人喰い鬼の女房は親切である。

さらに、日本の山姥の善なる面の表れた昔話として挙げられている「鬼の子小綱」は、比較対象としては不適切である。というのも、この話の親切な女というのは、鬼にさらわれた主人公の姉あるいは妻なので²⁸⁾、山姥や鬼女ではなく人間の女である。従って、親切な山姥が登場する昔話で確認する必要がある。親切な山姥の話としては、「山姥の仲人」や継子譚である「米福・栗福」が挙げられる。「山姥の仲人」では、山姥が貧しい孝行息子のために、金持ちの娘を攫ってきて仲を取り持つ。秋田県に伝わる「米福・栗福」²⁹⁾では、山に栗採りに来て道に迷った姉妹を、山姥が家に泊め、おそらく息子である人喰いの太郎と次郎に見つからないように隠してやる。太郎と次郎が人間の匂いがすると言うと、鳥の肉の匂いだとごまかすところは、ペローの「親指小僧」の魔女と同じである。

このように比較すると、確かに、山姥にも魔女にも人喰いという恐ろしい面だけでなく親切

な面も認められる。魔女と山姥は善悪両義性をもつという点でも共通していると言えそうである。しかし、善悪両義性という点については、さらに検討する必要があるように思われる。親切な魔女と親切な山姥に対する人間の態度、対応という観点からみると、違いが認められるからである。「親指小僧」の魔女は確かに親切な魔女ではあるが、親指小僧は親切な魔女の夫を騙して自分の子供を殺させ、さらに魔女を騙して全財産を奪う。「親指小僧」と同話型の口承話「悪魔の話」においても、人喰い悪魔の女房は道に迷った子供たちに食事とベッドを与えるが、やはり人間の子供たちは夫の人喰い悪魔を騙して自分の子供を食べさせてしまう。イギリスの昔話でも、主人公の娘は夫の人喰い鬼を騙して自分の子供を殺させる。さらに王子との結婚のために、人喰い鬼の家から様々な宝を盗み出し、最後には人喰い鬼を騙して女房を殺させる。魔女や人喰い鬼の女房が親切であっても、人間の主人公はその親切に対して報いるということはない。彼らをあくまでも悪しき存在として退治するか、あるいは敵として報復する。一方、「米福・粟福」の親切な山姥はこのような扱いは受けない。山姥が退治されるのは、「三枚の札」のような人喰い鬼婆として登場する場合のみである。この違いにはどのような意味があるのだろうか。昔話における山姥と魔女の役割、機能を詳しく比較検討して考えてみる必要がある。

2 「米福・粟福」類話における比較

2-1 親切な山姥と不親切な山姥

上記のように、「米福・粟福」には親切な山姥が登場するが、必ずしも親切であるとは言えない山姥が登場する話もある。先に挙げた秋田県の話の山姥は、人喰いから姉妹を守ってくれる、いかにも親切な山姥である。しかし、『日本昔話大成』第5巻の「米福・粟福」の類話を見ると、山姥が姉妹の一人にはきれいな着物や宝の入った箱を与えるが、もう一人には蛙や汚い物、石や骨の入った箱を与える場合もある。これは、高橋が「ヘンゼルとグレーテル」の魔女について指摘するように、山姥の善なる面が宝の箱を与え、悪なる面が汚い物や石の箱を与えており、山姥の善悪二面性が一つの話のなかに表れた例と考えるべきなのだろうか。しかし、「ヘンゼルとグレーテル」では魔女は退治されるが、「米福・粟福」では山姥は退治されることはない。「米福・粟福」の山姥は、物語の中で「ヘンゼルとグレーテル」の魔女とは異なった役割・機能を持っていると考えるべきだろう。この点を考察するために、「ヘンゼルとグレーテル」は「米福・粟福」とは同話型ではないので、同話型のヨーロッパの類話と比較検討してみるのがよいだろう。

「米福・粟福」は、国際話型「シンデレラ」(ATU510)として知られる継子譚の代表的な話であるが、前半は国際話型「泉のそばで糸を紡ぐ女たち」あるいは「親切な娘と不親切な娘」(ATU480)であることが多い。ここでは前半部分をヨーロッパの類話と比較してみる。

2-2 「贈与者」としての山姥、ホレ、フェ

まず日本の「米福・粟福」を見てみる。この話の前半部分の一般的な粗筋を以下に記す。話によって細部に違いはあるが、概ね次のような筋書きである。

米福と粟福という二人の姉妹がおり、米福は後妻の子、粟福は先妻の子である（名前は継子、実子が逆の場合もある）。ある日、継母が粟福には穴の空いた袋、実子の米福にはよい袋を持たせて栗拾いに行かせる。米福の袋はすぐにいっぱいになるが、粟福の袋はいつまで経ってもいっぱいにならない。米福が先に家に帰ってしまう場合もあるが、そうでない場合は二人一緒に道に迷い、山中で老婆の住処（一軒家や洞穴）にたどり着く。そこで老婆に頭の虱を取るように頼まれる。米福は気持ち悪く取ることができないが、粟福は親切に虱を取ってやる。すると親切の礼に老婆は粟福に宝物の入った箱を与えるが、米福には蛙、汚い物、石などが入った箱を与える。二人とも虱を取る場合には、礼に差し出された箱の重い方を米福が、軽い方を粟福が選ぶ。重い箱には石、馬や牛の糞、骨などが、軽い箱には宝や着物が入っている。

『日本昔話大成』第5巻に納められているこの話型の話70話のうち、継子を助ける人物が山姥である話をもっとも多く22話、次いで亡母である話は17話である。山姥は、上述の概要のように、しばしば虱とりの試練を姉妹に課し、親切に振る舞った者にものみ褒美を授ける。山姥はいわば親切な者には恵みを与え、そうではない者は罰するという女神のような行動をとる。さらに注目すべきは、山姥が継子に与える物は、上記のような着物や宝の入った箱以外に、「三度たたくとほしいものがでる小箱」、「たたけば欲しい物が何でもでる槌」、「好きなものが出る宝袋」などの不思議な呪具である場合があることである³⁰⁾。この場合の山姥は、プロップ(Пропт)の形態論における登場人物の機能の一つ「贈与者」に当たると言える³¹⁾。「贈与者」は、主人公を試し、その結果によって(主人公の反応が正ければ)、しばしば超自然的な呪具を与えるという機能を果たす人物である。呪具を与える「贈与者」は、当然ながら多くの場合、それ自身が神のような超自然的存在である。例えば、中国の類話「葉限」では、「贈与者」は天から降りてきた神らしき人物である。「米福・粟福」でも、山姥に次いで頻出度の高い亡母は超自然的な死者の霊である。「贈与者」が超自然的存在の女神であることは、ヨーロッパの類話においていっそう明らかである。

フランスの昔話では「妖精たち」³²⁾が、この話型に相当する。この話は概ね次のように展開する。

一人の女に二人の娘がおり、一人は優しく気だてが良く(しばしば継子)、もう一人は我が儘で意地悪である(しばしば実子)。ある日、母親の言いつけ(水汲みなど)で気だての

良い娘が出かけると、泉のそばや森の中などで妖精（聖母マリア、老婆）に出遭い、虱取りをしてほしい、あるいは食べ物や水を分けてほしいと頼まれる。娘が快く頼みをきいてやると、礼として宝石やきれいなドレスもらい、そして娘自身輝くように美しくなる。これを羨んだ意地悪な娘が同じように出かけて行き、同じことを頼まれ、褒美ほしさに嫌々ながらに我慢して頼みをきく。すると、見るも恐ろしいほど醜くなる。

ここでは、聖母マリアや妖精あるいは仙女と訳されるフェが、気立ての良い娘には褒美を、意地悪な娘には罰を与えている。単に老婆となっている話もあるが、その場合聖母マリアやフェの化身と解釈できる。娘を試し、正しい行いをした場合に褒美を与えるというのは、山姥と同じである。さらに、褒美は宝石やドレスに加えて美女に変身させる、罰は醜い姿に変えるという魔術的なものでもあり、やはりこれを与えるフェや聖母マリアは「贈与者」であると言える。この機能を、魔法を使う魔女が果たしてもよいように思われるが、この類話で「贈与者」が魔女であることはない。

グリム童話では、有名な継子譚の「ホレおばさん」(KHM24)がこの話型に相当する。話の展開は前掲の二話とほぼ同様である。ホレおばさん(以下ホレ)も働き者の娘には、魔術的な方法で褒美(黄金)を、怠け者の娘には罰(一生取れないコルタール)を与えており、山姥、フェ、聖母マリアに相当する「贈与者」である。ホレは大きな歯をした気味悪い姿の老婆であり³³⁾、いかにも魔女の相貌であるが、「ヘンゼルとグレーテル」に登場する人喰い魔女とは明らかに異なる存在である。

このように、「妖精たち」、「ホレおばさん」においては、山姥に相当する「贈与者」は聖母マリア、フェ、ホレである。彼らは不親切な娘、勤勉でない娘に罰を与え、親切な娘、働き者の娘に褒美を与える女神的役割を担っているが、山姥よりはるかに厳しい女神である。山姥の場合は罰として汚い物、役に立たない物を与えるだけだが、ドイツ、フランスの類話では、一生取れないコルタールを全身に付着させる、醜い姿に変えるというものである。これは魔女にも匹敵する恐ろしい仕打ちである。しかし、彼女らは人間を倫理的に裁定し、不誠実な人間を罰しているのであり、邪悪な目的で人間を害しているわけではない。人間の方でも、「ヘンゼルとグレーテル」、「親指小僧」、「モリー・フッピー」におけるような報復は行わない。罰せられるのは、あくまで人間の側である。この点は「米福・粟福」でも同じである。

2-3 「敵対者」としての魔女

それでは、同話型において魔女はどのような存在として登場しているのだろうか。ブリテン島とアイルランドの類話には魔女が登場するので見てみよう。イングランドに「魔女の婆さん」という話がある。以下は概要である。

ある夫婦に二人の娘がいる。一人の娘が奉公先を探しに家を出る。歩いていると竈があり、中からパンが「出してくれ」というので、出してやる。次に牝牛に出会い、「しぼってくれ」というので乳をしぼってやる。さらに歩いて行くと、リンゴの木があり、「実をふるい落とすしてくれ」というので、ゆすって実を落としてやる。やがて一件の家にたどり着くと、そこには魔女が住んでいる。けっして煙突の中を覗いてはならないことを条件に、魔女の家で働くことになる。魔女の外出中にうっかり娘が煙突の中を見上げてしまうと、お金のつまった袋が落ちてくる。娘はそれを持って家に帰ろうとするが、後から魔女が追いかけてくる。娘はリンゴの木と牝牛と竈の助けで逃げのび、家にたどり着く。その後、金持ちの男と結婚し幸せに暮らす。もう一人の娘も魔女の財産を盗もうと出かける。パン、牝牛、リンゴの木に同じことを頼まれるが、頼みをきいてやることなく歩き過ぎる。魔女の家にとり着くと、前とそっくり同じことが起こり、お金の袋を持って逃げ出す。しかし、リンゴの木、牝牛、竈の助けがないので、魔女が追いついてお金を取り戻し、娘をこっぴどくひっぱたく³⁴⁾。

(概略は筆者による。)

この話で興味深いのは、すでに紹介した類話とは異なり、「贈与者」が登場しないことである。主人公の娘は、「贈与者」から真面目な奉公の報酬として魔術的な褒美を与えられるのではなく、魔女の隠し持つ財産を盗む。しかもこの行為は、パン、牝牛、リンゴの木といった「援助者」による、親切に対する返礼としての援助によって可能になる。「ホレおばさん」でも、パンやリンゴの木に親切にするモチーフは存在するが、黄金の獲得はパンやリンゴの木の援助によるものではない。ホレによって勤労の報酬として授けられることによって獲得される。ここでの魔女がホレのように「贈与者」となる筋書きも可能であるように思われるが、イングランドの類話では魔女は「敵対者」である。

アイルランドには、これとほぼ同じ筋の「老婆の長い皮袋」という話が伝わっている。ただ、娘は三人登場し、父親はすでに亡くなっている。また、魔女の財産はもともと母親から盗まれたものという設定になっている。二人の姉は不親切なため「援助者」の助けがなく、魔女の金銀の入った袋を盗んで逃げるが魔女に捕まり、石に変えられてしまう。三番目の親切な娘は魔女の金銀を盗み、馬、羊、山羊、石灰窯、牛、水車という「援助者」に親切の返礼に助けられて逃げ延びる。魔女は「援助者」の水車によって碾かれて死ぬ。水車の助言で魔女の魔法の杖を使って、石に変えられた二人の姉も助けることができる。魔女が山姥、聖母マリア、フェ、ホレのような「贈与者」ではなく「敵対者」である点は、イングランドの場合と同様である³⁴⁾。

また、アイルランドには「地下の国の娘」という継子譚も伝わっている。話の展開は「老婆の長い皮袋」と「ホレおばさん」の混合型である。イングランドの話と同様、この話に登場する魔女も「贈与者」ではない。娘は魔女から宝の箱をもらうことになるが、この報酬の獲得は「ホレおばさん」や「妖精たち」、「米福・粟福」の場合とは異なる。以下がこの話の概略であ

る。

継子娘が継母によって井戸に突き落とされると、そこには青い空と草原の広がる地下世界がある。歩いていくと、垣根、竈、貧しい女性、雀、リンゴの木、羊、牝牛に出会い、それぞれの頼みごとを親切にきいてやる。やがて歯の長い、あごに髭の生えた魔女がその娘と住む家にたどり着き、そこで働くことになる。魔女は継子娘に暴れ牛の乳を搾る、糸の色を変えるなど、不可能な仕事を言いつけるが、娘は魔女の家にとどりつく前に助けてやった雀と女性（おそらく超自然的存在）の手助けによって仕事をこなすことができる。その報酬として、魔女は三つの箱から宝の箱を選ぶことができるという。娘は雀の助言によって、金、銀、鉛の三つ箱から正しく宝の入った鉛の箱を選ぶことができる。まんまと宝を奪われた魔女は怒り狂い、宝を持って逃げる娘を追いかける。しかし、親切にしてやった牝牛、羊、リンゴの木、垣根の助けによって、娘は地上の世界に無事逃げ戻ることができる。継子娘の話聞いた実子が同じように宝を得ようと井戸に飛び込む。継子の場合と全く同じことが起こるが、実子は冷たく不親切なため、援助を得ることができない。三つの箱から金の箱を選び、魔女に食べ物を与えられずに追い出される。不親切にした牝牛、リンゴの木、垣根に酷い仕返しをされ、命からがら地上に戻る。家に戻って箱を開けると、中からヒキガエルや蛇が沢山出てくる³⁶⁾。(概略は筆者による。)

この話に登場する魔女は「長い歯」をしていること、井戸の中の地下世界に住んでいることから、ホレを連想させるが、ホレのような女神的「贈与者」の性格は認められない。また、労働の報酬として箱を一つ娘に選ばせるところは、日本の山姥に似ているが、この話の魔女は娘が宝の箱を選ぶと、それが許せずに取り戻そうと娘を追いかける。娘は「援助者」の助けによって魔女から逃げのびることができるのであり、宝の獲得は彼女の親切に報いてくれた「援助者」の協力によるものである。従って、魔女は山姥のように褒美を娘に授けたわけではない。ここでも魔女は「贈与者」ではなく、「敵対者」として登場している。

2-4 「米福・粟福」の類話比較のまとめ

以上見てきた「米福・粟福」の類話比較から次のようなことが分かる。親切な主人公に褒美をもたらす「贈与者」山姥に相当する人物は、ドイツとフランスの類話ではホレ、フェ、聖母マリアであったが、イギリスとアイルランドの類話にはこのような人物は登場しない。その代わりに、主人公の娘が魔女から宝を奪う手助けをする「援助者」が登場する。そしてこの援助は、娘の施した親切に対する返礼としてなされている。この点で山姥、ホレ、フェ、聖母マリアが担っていた裁定者としての女神的役割は、ここでは「援助者」が担っていることになる。イギリスとアイルランドの類話に登場する魔女は、財産を奪われたり、殺されたりする。彼ら

は「贈与者」ではなく、プロップの機能では「敵対者」であり、「ヘンゼルとグレーテル」の魔女のように報復、退治されるべき存在である。少なくとも「米福・粟福」の類話においては、山姥と魔女は明らかに異なった役割・機能を与えられ、異なった扱いをされている。そしてヨーロッパの類話において、ホレ、フェ、聖母マリアは交換可能であるが、魔女はそうではない。ホレ、フェ、聖母マリアと魔女も異なった役割・機能を担い、異なった扱いをされている。こうしたことから考えられるのは、ヨーロッパの民衆にとって、ホレ、フェ、聖母マリアは魔女とは異なった存在として意識されていたのではないかと、ということである。そして、むしろ日本の山姥の方がホレ、フェ、聖母マリアに近い存在なのではないだろうか。

3 「米福・粟福」の類話以外における比較

3-1 民間伝承における山姥、魔女、ホレ、フェの類似

民間伝承におけるホレ、フェには、実は魔女と似通った点が存在している。しかも、この類似点は山姥と魔女の類似点として挙げた前掲の四点と一致する。

魔女は異界である森に棲むが、フェも山・森に棲む。ホレは井戸の底の世界に棲むとされているが、この井戸の底もやはり異界と考えられる。姿もやはり魔女同様に美醜二面性がある。ホレは典型的な魔女のような容顔で語られることもあれば、美女として語られる場合もある³⁷⁾。フランスのフェにしても、一般に若く美しい女性としてイメージされているが、妖婆の姿のものも存在するとされている³⁸⁾。魔女が魔法を使うように、フェもホレも不思議な魔術を使う。フェやホレに限らず、妖精は一般に空も飛べば、変身もする。さらに性格にも二面性がある。ホレは働き者の娘には幸福と美をもたらすが、怠け者の娘には恐ろしい罰を与えると信じられている。子どもを池に引きずりこむこともあるが、子宝を授け、農場の作物を見守るとされる³⁹⁾。フェが訪れた家には幸運が訪れるという言い伝えがある一方で、子供を攫ったり、愛人の人間の男を殺したりするとも考えられていた⁴⁰⁾。妖精は概して魔女同様に恐れの対象である。子供を攫うというのは、ヨーロッパでは妖精の代表的な悪事として知られている。約束を破れば報復されると信じられていた。また、妖精と関わって命を奪われるという話もある。イギリスには、山姥のように子供を取って喰うとされる妖精も存在する。一方で、気に入った人間がいれば、家事や農作業を手伝ったり、幸運をもたらしたりする妖精の存在も信じられていた⁴¹⁾。このように、ホレやフェなどの妖精は、住み処、外貌、魔法に加え、人間に親切であることもあれば害を与えることもあるという善悪両義性という点でも魔女に通じる。これはまさに、魔女と山姥の類似点として確認したことである。

さらに妖精は、魔女と異なる点においても山姥と同じである。これは先の「米福・粟福」の類話の比較分析で明らかになったことである。ホレ、フェは、人間を裁定し、正しい人間に褒美を与え、正しくない人間に罰を与える女神的存在であった。人間に与える仕打ちは厳しいも

のだが、山姥同様に人間側から報復されることはない。一方、魔女は、たとえ親切な行為をする場合でも、退治、報復の対象である「敵対者」でしかない。従って、ホレ、フェは非常に山姥に似た存在であることが分かる。少なくとも、「米福・粟福」の同話型類話においては非常に近い存在であることは確かである。

しかし、これはこの話型の昔話の中だけのことではないだろう。山姥とホレ、フェの類似性、そして魔女との違いを、さらに広い視野から考察する必要がある。他の話型の昔話、昔話以外の民間伝承、民俗社会において、それぞれがどのような存在であるのか検討してみよう。これによって、民衆にとってそれぞれがどのような存在であったか明らかにすることができるであろう。

3-2 民俗神である聖母マリア、フェ、ホレ、山姥

ホレやフェが民衆の間でどのような存在であったかは、聖母マリアについて考えてみるのが分かり易い。聖母マリアは信仰の対象である。そして昔話において聖母マリアと交換可能なフェも民俗社会では信仰の対象であったはずである。この点について長野晃子が興味深い報告をしている。長野によれば、フランスにおけるフェは、ポール・セビヨ (Paul Sebillot) の「女神たちが妖精になった」⁴²⁾ という言葉が示すように、前キリスト教時代には女神であり、民俗社会においては依然として異教的女神として信仰の対象である。フランスにはフェが司っている山、森、泉などが多数あり、従って無数のフェが存在するとされる。そして無数のフェの中には、農作物や畜産物に豊饒をもたらす作神や子宝を授ける子安神としてのフェがいるという。かつては豊作祈願や豊作感謝のためにバターや蜂蜜などの供え物をしていと伝えられている。感謝を怠ってフェの機嫌を損なえば、飢饉になったという⁴³⁾。昔話の中だけでなく民間信仰においても、フェは善人には褒美を与え、そうでない者には罰を与えるとされていたことが分かる。また、聖母マリアはキリスト教化によって多くの説話・伝承でフェに取って代わっており、キリスト教的なのは名称だけで、機能はフェと同じである。民間信仰化した聖母マリアは、実質的には異教的民俗神であるという⁴⁴⁾。そしてホレの場合も、フェと同様に一種の妖精であり、やはり前キリスト教時代には女神であったと考えられている。ホレはホルダ (Holda) ともいい、元来、糸紡ぎと豊饒の女神であると同時に天空の女神でもあるという⁴⁵⁾。民間信仰においても、ホレは年に一度国中を回って田畑に実りをもたらす、ホレが棲むとされる泉に詣でる女性には、子宝と健康を恵むと信じられている。また、紡ぎ女が仕事を怠けていると糸を撚れさせたり、糸巻棒を汚したりして懲らしめ、糸紡ぎに精を出す娘には紡錘を授けたり、代わりに糸紡ぎをしてやったりするとされている⁴⁶⁾。やはりホレも民間信仰の女神である。

こうしたフェやホレに昔話において相当する山姥についてもまた、民俗社会において女神として信仰され祀られている事例がある。例えば、高知県高岡郡には、山姥を祀る祠が存在し、祭日には人々が参拝し御神酒や餅などを供える⁴⁷⁾。また、高知県土佐郡には、山姥に神楽を

奉納して豊作を願うという村もある⁴⁸⁾。岩手県遠野には山の神の像として山姥像が祀られている⁴⁹⁾。産の神として信仰されている地域もある⁵⁰⁾。

このように、「米福・粟福」とその類話において人間を裁定する女神的存在である山姥、ホレ、フェは、民俗社会においても信仰され、祀られている女神である。彼女らは民衆が信仰する民俗神であると言える。先に述べたように、民間伝承において妖精は魔女同様に恐れの対象であった。最悪の場合には人間の命を奪うこともある。妖怪である山姥の場合も同様である。しかし妖精や山姥は女神として信仰の対象でもある。こうした現実生活の中で信仰対象であるがゆえに、彼女らは昔話においても女神的存在として語られてきたと理解できる。それでは、同話型の昔話において「敵対者」としてしか登場しない魔女は、民間伝承や民俗社会においてどのような存在であるのか。

3-3 人間である魔女

ヨーロッパのなかでも、魔女の概念は民族や国によって必ずしも一様ではない。また、ヨーロッパの場合、民衆レベルでの魔女像は、キリスト教神学者による悪魔学や魔女裁判のテキストによって形成された知識層の魔女像と完全に一致するわけでもない。そこで、ここではフランスとブリテン諸島における民衆の魔女像を検討する。

フランスの魔女

ジャクリーヌ・シンプソン (Jacqueline Simpson) は魔女信仰について次のように述べている。

ある意味で魔女は多かれ少なかれ普通の人間であると考えられている。その悪事がたとえ魔術的な効果をもたらすとしても、それは人間の能力の範囲を超えるようなものではない。例えば、呪いをかけたり、催眠術を施したり、人形に釘を打ち付けたりといった行動を取るだけである⁵¹⁾。

シンプソンが述べているように、魔女は魔術的な悪事を働くものの、悪魔のような本来超自然的存在などではなく人間である。しかも、そもそも魔女と呼ばれた女性は悪事を働く存在などではなく、病気の治療法などの知識豊富な「賢女」でさえあった。こうした女性のなかに産婆も入る。J. ミシュレ (J. Michelet) はその著書『魔女』のなかで、民衆の医者であった産婆が病を治せないときに、人々に非難され魔女と呼ばれたのだと述べている。

・・・いずれの身分に属する者であれ大衆は、いや世間一般はと言ってよい、彼らはサガ、言いかえれば、「産婆」にしか診察を求めなかった。彼女が病人を癒すことができないとき、

人びとは彼女を非難し、魔女とよぶのだった⁵²⁾。

長野によれば、フランスの民間において魔女とは「要するに、物知りで人や家畜の病気の民間療法師で、失せ物のありかや行方不明者の居場所を占う占い師である」⁵³⁾という。頼りになる物知り婆のことをフランスの村人たちは魔女と呼んでいたのである。このような魔女の例として、長野はジョルジュ・サンド (George Sand) の描くファデー婆さんを紹介している。

ファデー婆さんは・・・、その日の「食べるものには一向にことを欠かなかった。世間のいろいろな病気や災難についてひどく物知りで、方々から診てもらいに来るからだった。・・・どんなに老いぼれて痩せた牛でも、婆さんのところへ連れて行けば、ほかのいい牛の乳と入れ換えていい乳がでるようにしてくれるというような噂は信用する気になれないが、婆さんの知っている薬で、冷え症を治す薬とか、切り傷や火傷に効く膏薬とか、熱冷ましの水薬というものは、たしかに金を取っても恥ずかしくないものだった・・・。田舎では物知りは多少なりとも魔法使い扱いされるもので、婆さんもまだまだいろいろ知っているのだが、隠して言わないのだと思われていた。それに失せ物やいなくなった人を探す力を持っていると噂されていた。そして婆さんは産婆もしていた」⁵⁴⁾。

ここに描かれている魔女は、人里離れた山に棲む人喰い鬼婆や妖婆などではなく、村に住む物知り婆さんにすぎない。しかし、その「物知り」ゆえに、村人にとって有難い存在でもあれば、魔法使いとして恐れられる存在でもあったことが分かる。前掲のミシュレの言葉どおり、治療に失敗すれば、悪意のある魔女とされたのであろう。

長野によれば、魔女裁判のマニュアルとなった『魔女の鉄槌』などの中世悪魔学において概念規定されている魔女像は、フランスの本格昔話にはほとんど見られないという。フランスの本格昔話の魔女は、先に引用したジョルジュ・サンドの作品に登場するファデー婆さんように、物知りなだけで超自然的力など持たない、何ら魔法的な行為もしないという。悪事を働くといっても、他人の幸せを奪ったり、嫉妬深く意地悪であったりするだけなのである⁵⁵⁾。ひとつ具体例を見てみよう。日本を含めて世界中に広がる国際話型の一つに「手なし娘」(ATU706)という話があり、フランスにも約50話記録されているというが、そのなかでロワール地方において採集された話に魔女が登場する⁵⁶⁾。

「手なし娘」は、罪のない娘が両手を切り落とされて家を追い出されるが、最後に手がはえ、幸せに暮らすという話である。日本の場合、娘の手を切り落とすのは継母であるが、ヨーロッパの話では、性悪な継母や姑の他、兄嫁、悪魔などが娘の手を切り落とす場合が多い。ロワール地方の話では、自分の夫が妹をいつまでも溺愛するのを妬んだ女が、魔女に義理の妹を追い出す方法を相談する。女は魔女の助言で、自分の息子を鍋に放り込んで殺し、それを妹の仕業

だと夫に思わせる。息子を妹に殺されたと信じ込んだ夫は、妹を森へ連れて行き、両手を切り落として置き去りにする。ここに登場している魔女は、確かに相談に来た兄嫁に息子を鍋で煮てしまえという助言をするが、実際に手を下すのは兄嫁本人である。この場合本当に恐ろしいのは、魔女よりむしろ兄嫁の方である。実際、魔女に相談することなく、兄嫁自身がひとりで悪事を計画する筋書きの話も存在する。そして何より、魔女自身は助言するだけで、何ら魔法を使わないことに留意しなければならない。単に性悪な隣所の老婆を魔女と呼んでいるのにすぎない。超自然的な存在であることを窺わせるような言及は一切ない。また、話の後半で、この魔女は、結婚した娘に子供が生まれたあと姑と夫の間で取り交わされる手紙をすり替えてしまうが、このときにも特に魔法を使ったというようには語られていない。

このように、フランスの昔話に登場する魔女は、空中飛行、動物への変身、幼児殺し、人喰い、サバトといった悪魔学や魔女裁判のテキストにお馴染みの魔女像とは、およそかけ離れたものである。そこに認められるのは、超自然的魔女像ではなく、血と肉を持つきわめて人間的な魔女の姿である。悪魔学的魔女像とフランスの民衆の抱く魔女像との間には、断層が存在しているのである。民衆レベルでの魔女像を検討する際には、この点に留意して考えねばならないことがわかる。悪魔学や魔女裁判によって形成された魔女のイメージは、確かに民衆に浸透し、民衆の意識になったという側面がある。しかし、その程度は地域によって異なる。フランスでは、その浸透度合いはどうか低いようである。それでは次に、海を隔てたブリテン島やアイルランドの場合を見てみよう。

ブリテン諸島の魔女

アイルランドやブリテン島の民衆にとって魔女とはいかなるものなのであろうか。フランスでは人間的な魔女像が一般的であった。次の引用箇所は、スコットランドの魔女に関して述べた文章であるが、これを読む限り、魔女狩りの激しかったスコットランドにおいても、フランスの場合と同様に魔女はただの人間の老女であったようである。

「魔女」はめったに罪など犯したことの無い老女である。犯した罪があるとすれば、人付き合いが悪い、あるいは何世紀も昔から受け継がれてきた治療法を使うなどにすぎない⁵⁷⁾。

ブリッグスも「民間伝承におけるほとんどの魔女は、ただ自分を悪魔に売った老女にすぎず、妖精などではまったくない」⁵⁸⁾と述べており、やはり魔女は本来人間であると考えていた。彼女が妖精との違いを指摘しているのは、魔女が超自然的存在ではないということ在意図していると考えられる。しかし、ブリッグスの説明では、魔女は魔術を使って使い魔を操り、自ら変身し、家畜や人間に病気などの害を及ぼす存在であり⁵⁹⁾、この点はフランスの魔女と違いがある。

民話や伝説のなかに登場する魔女を検討することによって、ブリテン島とアイルランドの民衆の魔女像がある程度把握できる。先に検討したアイルランドの「うすのろと王子」や「老婆の長い皮袋」に登場する魔女は、フランスの魔女とは異なり魔法を使っていた。他の民話、伝説でも、魔女は動物に変身して牛から乳を盗むなど、魔法を使って悪事を働いている。しかし、やはり中世悪魔学の魔女像とは必ずしも一致するものではない。使われる主な魔術は、動物への変身や、家畜や人間を病気にさせるというものである。最も一般的な悪事は、野兎に化けて牛乳を搾り取る、あるいは牛に魔法をかけて乳を盗むというものである。そして、牛乳盗みなどの悪事を働く魔女は、超自然的存在ではなく村の住人の一人である。家族と暮らし、家族が魔女の悪事に荷担している場合もある。

興味深いのは、こうした悪事を働く魔女に対して、対抗魔術を用いて村人を助ける魔女も存在することである。悪事を働く魔女は「黒魔女」、村人を助ける魔女は「白魔女」あるいは「賢女」と呼ばれている⁶⁰。アイルランドでは「白魔女」は「妖精学者」と呼ばれ、男性の場合も多い。W. Y. イェイツ (W. E. Yeats) によれば、魔女は悪霊に力を授かり、妖精学者は妖精に力を授かるものだと考えられている。魔女はいつも人々から恐れられ嫌われているが、妖精学者の方は頼りにされ、助言を求められる存在である⁶¹。イェイツの編集した民話集には、「魔法にかかったバター」というタイトルの話が二話納められている。ひとつはドネゴール地方、もうひとつはクィーンズ地方で採集されたものである。これらの話は本格昔話ではなく固有名詞で語られた事実譚なので、民俗社会での魔女がいかなるものであったかを知ることができる。どちらもある村人の飼っている牛が突然乳を出さなくなり、それを妖精学者が魔法のためだと見破り、対抗魔術で村人を救うという話である。クィーンズの妖精学者は老婆だが、ドネゴールの妖精学者は男性である。そしてクィーンズの老婆の妖精学者は素性が分からないということになっているが、ドネゴールの妖精学者は被害者の村人もその名前を知っている人間である。牛に魔法をかけた魔女は、どちらの場合もやはり村に住む女である。

ここで重要なのは、こうした話に登場する悪事を働く魔女も村人を助ける魔女も、どちらも不思議な魔術を使うが、あくまで村に住む人間であり、決して彼らが悪魔や妖精といった超自然的存在ではないということである。この点はフランスの場合と同様である。同じような話は無論ブリテン島にも存在している。アイルランドやブリテン島でもやはり魔女は人間である。

以上見てきたように、ヨーロッパの民間伝承、民俗社会において魔女は本来人間であり、悪魔のような超自然的存在ではなかった。しかし、呪術的知識を持っていたため、人々に頼りにされると同時に恐れられてもいた。この意味で魔女はやはり両義的存在であったと言える。では、なぜ昔話では「敵対者」としてしか扱われないのか。これには、民衆に浸透した悪魔学的魔女像が関係しているのであろう。最後にこの点について考察する。

4 超自然的である山姥、妖精と人間である魔女

4-1 断罪可能な魔女

山姥や妖精とは異なり、魔女は民俗社会では共同体の一員である人間であった。しかし、シンプソンが指摘しているように、超自然的な力をもった悪の権化として神話化されることにもなった。このことに関して、前掲の引用に続けてシンプソンは次のように述べている。

しかし他方、魔女は憎悪と恐怖をかき立てる空想上の存在でもある。魔女は、持っていると思われる超自然的能力の異常性のために、人間とはみなされなくなり、悪魔や人喰い鬼婆と混同されるようになっていく。自由に動物に変身し、姿を消して他人の家に侵入し、様々な道具に乗って空中を飛ぶ。また、子供を食べ、その血を吸い、殺した人間の精気で生きていられるようになってしまった。このような不気味であり得ない魔女信仰が神話化してしまっている。そのため、嫌疑を掛けられた村の女性が、こうした超自然的魔女のステレオタイプに仕立てられてしまうことになる。その結果が、1450年から1700年頃までヨーロッパを席卷した魔女狩りである⁶²⁾。

魔女は病気や作物の不作、家畜の病気などの不幸、災厄が起こると、スケープゴートの対象となった。しかし、不幸や災厄は妖精がもたらすものであるとも考えられていた⁶³⁾。シンプソンが指摘するように、妖精の仕業である場合には呪いで対処するしかないが、共同体の一員である魔女の仕業であれば、犯人として断罪することが可能になる⁶⁴⁾。魔女は人間であるからこそ、排斥し、スケープゴートの対象にできたのである。人間ではなく超自然の女神であるホレやフェは排斥されることなどあり得ない。同じことは山姥についても言える。

このような魔女と山姥の扱われ方の違いについては宮田登も指摘している。彼は、山姥伝説が基になった弥三郎婆の伝説、さらに謡曲『紅葉狩』の基になった長野県戸隠の鬼女伝説に言及し、日本の鬼女と魔女の違いを次のように指摘している。

弥三郎婆は真言宗、紅葉は天台宗にそれぞれ靈的に征服されたが、一方からみると山間部を支配した女神のイメージがある。妖術を使ったり、人肉を喰ったりする鬼女として位置づけられ、やがては、中央の仏教の管轄下に置かれたが、その際、鬼女が神に転生して、靈驗あらたかな存在になるという民俗になったことは、日本の鬼女の特色だろう。彼女たちは魔女のごとく悪魔の眷属として徹底的に排除されなかったのである⁶⁵⁾。

山姥や鬼女は魔女同様に恐怖の対象ではあったが、現実社会で魔女のように排斥され、山姥

や鬼女とされて処刑される女性がいたわけではない。これがヨーロッパの魔女と日本の山姥の違いであり、この違いの背景に、魔女は本来人間であるが、山姥は人間ではなく、それどころか神でさえあったという違いがある。

山姥のような妖怪は人間ではないように、ホレやフェなどの妖精も人間ではない。妖怪や妖精が人間ではないというのは、これらが生身の人間ではなく、人々の想像力によって作り出された共同幻想の超自然的存在であるということである。また、女神としての山姥、ホレ、フェもやはり同じ意味で超自然的存在である。すでに述べたように、魔女は本来人間であったが神話化されて共同幻想となった。魔女が妖精と類似した属性を持つのは、おそらく神話化される時に妖精伝承からの借用やそれとの混合が起こったのであろう。そして魔女もまた超自然的な存在と化した。依然として現実の共同体には人間である魔女が実在する。共同幻想である悪の権化が実在する人物と結び付けられて実在化したとき、魔女狩りの対象となった。山姥やホレ、フェはあくまで共同幻想であり実在化することはなかった。従って、現実の女性が排斥されたり、断罪されたりすることにはならなかったのである。

4-2 畏怖の対象としての山姥と妖精

共同幻想である山姥は人を喰う妖怪でもあるが、同時に女神でもある。この両義性は、すでに指摘した村人にとっての魔女の両義性とは異なるものである。山姥の両義性は、小松和彦による妖怪の定義によって説明できる。小松によれば、妖怪と神はどちらも超自然的存在であるがゆえに区別が難しい。原因不明の病気、干ばつ、作物の不作、天災など、人知を超えた不可思議な現象、自然のもつ超自然的な力を説明しようとするとき、人びとは現象を起こす神秘的な存在を想定し、想像力によってこれを具象化する⁶⁶⁾。これが妖怪あるいは神である。従って、妖怪と神はともに「人間が制御できない超自然的存在」⁶⁷⁾であり、「畏怖の対象」となる。妖怪と神の違いは、祀られる存在か、祀られない存在か、ということにつきるということになる⁶⁸⁾。同じことはホレやフェなどの妖精についても言える。妖精もまた、人知を超えた現象、原因不明の災厄の説明として想定され、共同幻想によって具象化された超自然的存在である⁶⁹⁾。それゆえ、嵐を起こす、子供を攫う、病気をもたらすなどと恐れられる一方で、神として祀られもする。神であれば、たとえ人間に害をなす存在であっても、断罪することも報復することも不可能である。山姥が報復、退治されるのは、「天道さんの金の綱」や「三枚の札」など、人喰い鬼婆としてのみ登場する昔話のなかだけである。

魔女も共同幻想によって具象化された恐怖の対象としては超自然的存在である。すでに述べたように、妖精の仕業とされる家畜の病気や干ばつなどの天災は、魔女の悪事ともされてきた。従って、不可思議な現象の説明としての魔女も、妖精のように神として畏怖の対象とも成り得た。しかし、魔女は本来人間であったため、災厄や不幸を悪意によってもたらした犯人として断罪することが可能である。このような断罪可能な存在としての魔女像は、昔話にも反映され

ることになる。従って、現実世界でも昔話の中でも、魔女は人間に害なす「敵対者」として排斥、報復、退治の対象であり得た。それゆえ、魔女は畏怖の対象である神には成り得なかったのである。

おわりに

異界に棲み、醜い老婆でも若い美女でもあり、人間に害をなすこともあれば、人間を助けることもある。こうした属性だけを見れば、魔女も妖精も山姥に類似する。しかし昔話において、魔女はたとえ親切な態度をとる場合であっても、「敵対者」として報復、退治される。一方、山姥や妖精は「贈与者」として登場する場合には、人間にひどい仕打ちをしたとしても報復されることはない。これは「贈与者」である山姥や妖精は、いわば人間を裁定する女神的存在であるからである。不親切な人間や怠け者を山姥や妖精は罰しているのだから、邪悪な目的で人間を害しているのではない。この違いの背景には、民衆にとって、山姥と妖精は人に害をなす恐怖の対象であるが、女神として祀られる存在でもあったという事実がある。一方、魔女は民俗社会においては本来的に人間である。神話化されて悪魔的魔女像が作り出されるが、人間の魔女が実在する以上、スケープゴートとして断罪の対象になるだけであり、山姥や妖精のように完全な超自然的存在ではあり得ない。従って、山姥や妖精のように神として畏怖の対象になることはなかったのである。この点で山姥と妖精は非常に似通った存在であるが、魔女は異なると言わねばならない。

【注】

- 1) 宮田登『ヒメの民俗学』新装版(青土社、1993年)、191-92頁。
- 2) 大和岩雄『魔女はなぜ人を喰うか』(大和書房、1996年)、94-95頁。
- 3) 高橋義人『魔女とヨーロッパ』(岩波書店、1995年)、第一章、第三章を参照のこと。
- 4) 大塚民俗学会編『日本民俗事典』(弘文堂、1994年)、760頁。
- 5) 野村滋訳『完訳グリム童話集』第1巻(筑摩書房、1999年)、165頁。
- 6) 高橋義人『魔女とヨーロッパ』(岩波書店、1995年)、38頁を参照のこと。
- 7) Joseph Jacobs, *More Celtic Fairy Tales* (1894: New York: Crescent Books, 1990), 135-55.
- 8) 柳田国男『山の人生』『遠野物語・山の人生』岩波文庫(岩波書店、1976年)、71頁。
- 9) 『完訳グリム童話集』第1巻、165頁。
- 10) Jacobs, 146.
- 11) 高橋、前掲書、34頁、大和、前掲書、125-56頁。
- 12) 高橋、前掲書、33頁。
- 13) 同書、169頁。
- 14) 同書、34頁。
- 15) 大和、前掲書、125頁。
- 16) 宮田、前掲書、191-92頁。
- 17) 高橋、前掲書、51頁。
- 18) 大和、前掲書、94頁。

- 19) 野本寛一『焼畑民俗文化論』(雄山閣、1984年)、269-70頁。
- 20) 大和、前掲書、115-16頁。
- 21) 高橋、前掲書、193-104頁。
- 22) この昔話の国際話型番号はウター (Hans-Jörg Uther) による *The Types of International Folktales*, 2 vols: FF Communications No. 284-285 (Helsinki, 2004) に基づく。ATUとは、アアルネ (Antti Aarne)、トンプソン (Stith Thompson)、ウターの頭文字をとった略表記であり、この後に番号を付記することによって三者による昔話の国際分類カタログ番号が示される。
- 23) 高橋、前掲書、104頁。
- 24) 大和、前掲書、121頁。
- 25) 高橋、前掲書、107-108頁。
- 26) 朝倉朗子編訳『フランスの民話』岩波文庫 (岩波書店、1993年)、116-21頁。
- 27) K. M. Briggs, *A Dictionary of British Folk-Tales in English Language*, Part A, vol. 1 (1970: London and New York: Routledge, 1991), 400-403.
- 28) 関啓吾編『日本昔話大成』第6巻 (角川書店、1978年)、253-67頁。
- 29) 関啓吾編『一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎-日本の昔ばなしⅢ』岩波文庫 (岩波書店、1957年)、85-89頁。
- 30) 関啓吾編『日本昔話大成』第5巻 (角川書店、1978年)、86-116頁。
- 31) ウラジーミル・プロップは『昔話の形態学』(1969年)において昔話の登場人物を7分類している。「贈与者」はそのひとつであり、主人公を試し、その結果によって (主人公の反応が正しければ)、呪力の備わったものを与える。これが後に主人公の災い、不幸を解消する。(『昔話の形態学』水声社、1987年)
- 32) フランスの話型目録『フランスの昔話』(*Le Conte populaire français*) の編者ポール・ドラリュ (Paul Delarue) によってこの話型につけられた題名。ペローの「仙女たち」もこの話型である。
- 33) 『完訳グリム童話集』第1巻、255頁。
- 34) Joseph Jacobs, *More English Fairy Tales* (London: Nutt, 1894), 94; K. M. Briggs, *A Dictionary of British Folk-Tales in English Language*, Part A, vol. 1, 432-35.
- 35) Seumas MacManus, *Donegal Fairy Stories* (New York: Dover, 1968), 233-46.
- 36) Patrick Kennedy, *Legendary Fictions of the Irish Celts* (London: Macmillan, 1866), 33-37.
- 37) グリム兄弟『ドイツ伝説集』上巻、桜沢正勝、鍛冶哲郎訳 (人文書院、1987年)、8頁。アンナ・フランクリン『図説妖精百科事典』井辻朱美監訳 (東洋書林、2002年)、419頁。
- 38) フランクリン、396頁。
- 39) 『ドイツ伝説集』上巻、8頁。
- 40) フランクリン、396頁。
- 41) イングランドのレスターシャーにあるデイン丘にはブラック・アニス (Black Annis) と呼ばれる妖婆が出没し、子供を取って喰うとされている。イングランドおよびスコットランドでは家事や農作業を手伝うブラウニー (Brownie) が知られているが、機嫌を損ねると報復されると信じられている。
- 42) Paul Sebilot, *Les Eaux Dous* (Paris, 1938), p. 32.
- 43) 長野晃子「フランスの作神様、子安様」『説話・伝承学』第10号 (2002年)、14-16頁。
- 44) 同書、22-23頁。
- 45) フランクリン、419頁。Jacob Grimm, *Teutonic Mythology*, vol. I, trans., J. S. Stallybrass (1880: London: Routledge/Thoemmes Press), 266-71.
- 46) 『ドイツ伝説集』上巻、8頁。
- 47) 神尾健一「土佐の山姥」『土佐民俗』第46号 (土佐民俗学会、1986年)、7-8頁。
- 48) 桂井和雄『俗信の民俗』民俗民芸双書79 (岩崎美術社、1973年)、13-14頁。
- 49) 赤坂憲雄『山の精神史-柳田国男の発生-』小学館ライブラリー (1991年; 小学館、1996年)、210頁。
- 50) 鎌田久子「ウバの力」『日本民俗学』第98号 (日本民俗学会、1975年) 1-10頁参照。
- 51) Jacqueline Simpson, *European Mythology* (London: Hamlyn, 1987), 99.
- 52) ジュール・ミシュレ『魔女』上巻、篠田浩一郎訳、岩波文庫 (岩波書店、1983年)、13頁。

- 53) 長野晃子「フランスの魔女と妖精と聖母マリア」安田善憲編『魔女の文明史』（八坂書房、2004年）、336-37頁。
- 54) 同書、336頁。
- 55) 同書、342頁。
- 56) 朝倉朗子編訳『フランスの民話』、182-87頁。
- 57) Stuart McHardy, *Scotland: Myth, Legend and Folklore* (Edinburgh: Luath Press, 1999), 72.
- 58) K. M. Briggs, *The Personnel of Fairyland* (1953: Detroit: Singing Tree Press, 1971), 170.
- 59) Briggs, *A Dictionary of British Folk-Tales in the English Language*, Part B, vol. 2, (1971: London and New York: Routledge, 1991), 610.
- 60) *ibid.*
- 61) W. B. Yeats (ed.), *Fairy and Folk Tales of Ireland* (1888 and 1892: New York: Macmillan, 1983), 133.
- 62) Simpson, 99.
- 63) *ibid.*
- 64) D. L. Ashliman, *Fairy Lore: A Hand Book* (Westport: Greenwood, 2006), 29-30.
- 65) 宮田、前掲書、193-94頁。
- 66) 小松和彦『妖怪学新考』（小学館、1994年）33頁。
- 67) 小松和彦『妖怪文化入門』（せりか書房、2006年）、11頁。
- 68) 小松『妖怪学新考』、34頁。
- 69) Ashliman, 1 and 29-30.

【2013年9月10日受付，11月8日受理】

Yamamba, Fairies and Witches in Folktales and Folk Lore

TAKASHIMA Yoko

This paper shows that *yamamba* (mountain hag), a Japanese folkloric figure, is more similar to fairies such as Frau Holle and fées than witches in European folklore. Some critics have pointed out that *yamamba* and witches have some similarities: cannibalism, shape-shifting, duality in character, etc. But in some folktales they are differently treated by the hero/heroine. For example, in some of the folktales belonging to Type 480, the German and French counterparts of *yamamba* are Frau Holle and a fée (or the Virgin Mary), not a witch. *Yamamba* or her counterpart acts as the goddess-like *donor*, who tests and judges the two girls to give a reward to the good one and punish the bad. But even if the witch is kind to the hero/heroine, she is destroyed or revenged as the *villain* by him/her. This difference indicates that the role of *yamamba* or her counterparts is different from that of witches in real folk life and beliefs. People worship *yamamba*, Frau Holle, and fées as goddesses as well as regard them as threatening supernatural beings. On the contrary, witches are normal village women, not supernatural evil spirits, though they sometimes make hostile actions by cursing. In this respect, *yamamba* is much more similar to fairies than witches.

Keywords: *Yamamba*, Witch, Fairy, Goddess